

令和二年度 第六十三回 卒業証書授与式 式辞

校門の桜の木にも、新しい花芽が見つかるようになり、着実に、時は前に進んでいることが実感できます。歳月の流れは速いもので、三年前に希望に満ち溢れて石の門をくぐった六十三期生も本校を巣立つ時を迎え、本日、ここに卒業証書授与式を挙げるにあたり、ひとこと申し上げます。

一年前の二月二十七日、時の総理大臣が全国一斉休校を要請し、戸惑いのなかで異例の卒業式を迎えた時には、一年も経てば以前の日常を取り戻し、例年通りの風景で皆さんを送り出せるだろうという期待を抱いていました。希望的観測に反して、本年度の卒業式も卒業生と保護者のみの式典とさせていただくことになり、いささか残念ではありますが、皆さんの晴れの門出に立ち会うことができなかつた後輩たち、例年であればご臨席いただいている同窓会長はじめ各関係の皆さまも、離れたところから、きっと祝福を送ってくれていることと思います。

PTA 会長 鬼頭孝義 様には、この後、本来ならばご祝辞を賜るべきところ、やむを得ず省略させていただくことをご容赦願います。

さて、保護者の皆さまには、お子様が本校の教育課程を修了して、新たな将来に一步を踏み出されることを、心からお慶び申し上げます。三年前の入学式後に、「課題の分離」のお話をしたのをご記憶でしょうか。お子さまが自分の立てた目標に向かって努力するのもしないのも、あくまでお子さまの課題であり、この課題に保護者が介入することは、お子さまが課題を解決するチャンスを奪い、成長の妨げになると申し上げました。お子さまの課題に介入するのではなく、しっかり話を聞き、お子さまがほっとできる家庭であり続けるという「保護者としての課題」は果たせたでしょうか。そして、お子さまはお子さま自身の課題を解決する力、たとえ失敗しても立ち直ってもう一度課題に立ち向かおうとする力を身に付けられたでしょうか。答えは、目の前のお子さまの、大きく、たくましく成長した姿にはっきり見て取れると思います。

卒業生の皆さん。卒業おめでとうございます。入学式で、これからの学校教育は「競い合い、(限られたイスを)奪い合う」学習から、「学びあい、高めあう」学習へと、その学びの変革を目指していること、AIが多くの仕事を担い、人には人にしかできない仕事が求められるこれからの時代を生き抜くためには、自分の頭で考え、異なる価値観の他人と意見を交わし、協力してより良い解を求めていく力が必要だ、と言いました。皆さんは、「先行き不透明な時代」が待ち受けていると言われ、たくましく生きるために、自ら考え、自ら判断し、主体的に行動できるように、と言われ続けてきました。そして、この1年間は、その不透明さが顕著に具現化した1年だったとも言えるでしょう。しかしながら、そもそも、透明な先行きというものはあるのでしょうか。先行きというもの

は不透明なのが当たり前で、これから先のことを予測できると思い込んできたことが、幻想にすぎなかったのかもしれませんが。いずれにせよ、想定外の事態を受けて、思考停止したり、当事者意識を持たずに評論家然としたりすることなく、私たちは自分事として、与えられた条件の中で最適解を求め続けなければなりません。そのためには、自分一人の狭い価値観だけで判断するのではなく、他者と協働して集団としての最適解を求めるプロセスを地道に積み重ねていくしかありません。

卒業する皆さんは、そのために必要なかけがえのない仲間と、この伊勢高で出会いました。これからの社会の担い手として、自分の強みと弱みを自覚し、他人の強みも弱みも受け入れたうえで、お互いをリスペクトしつつ、よりよい社会を築いていってほしいと願っています。

先行きが不透明だからこそ、どんな明るい未来でも創りだせる可能性があります。若い皆さんには、この1年間に奪われたものをいつか取り戻せる時間がたっぷりあります。また、君たちにはそうできる力がこの伊勢高でしっかり身についたと思います。君たちがいる限り、未来は明るい信じることができます。

本日、こうして卒業生の門出を迎えられましたことを、保護者の皆様とともに喜び申し上げるとともに、卒業生の皆さんの健康と、輝かしい前途を祈念して、式辞といたします。卒業おめでとう。

令和三年 三月 一日

三重県立伊勢高等学校長
真崎 俊明